

## シネマ日記



No. 72

○月×日 死期を迎えた患者には自然死を望むのか、それとも延命治療を施すのか。意識が戻らない事態になつて、家族は「これ以上は苦しむことなく、安らかに旅立ってほしい」と思うのか、「人工呼吸器に頼っても命ある限りは」と一縷の望みを抱き続けるのか。最期を看取る家族の心情は複雑だ。が、それを託される医師の倫理的な責任は重い。「終の信託」（周防正行監督）は、その重いテーマに真正面から向き合う。主人公の女医（草刈民代）が不倫相手の同僚医師（浅野忠信）に裏切られ、自殺未遂を引き起こすことから物語が始まる。そんな失意を癒してくれたのが、20年来

リング十分。蛇に睨まれた蛙、こうしてあることもないことも「自白」させられるのだなあ、と思つてしまふ。この映画のもう一つの見どころだ。

○月×日 生徒が6人しかいない北海道の島の分校に若く美しい女教師（吉永小百合）がやってくる。先生は子どもたちに「歌を忘れたカナリアは」などの童謡を教え、皆の心を一つにしていふ。「二十四の瞳」の再来だ。ところが、ある悲しい事件が起き、先生は島を追われ、「北のカナリアたち」（湊かなえ原作、阪本順治監督）たる子どもたちも歌を捨てた。それから20年、東京で暮らしている元先生のもとへ、刑事が訪ねてくる。「〇〇を殺人容疑で追っている。あなたの所に連絡はないか」と。これがきっかけで、教えず一人ひとりに再会する。物語は、若者になった子どもたちのそれまでの人生の回想を通して、あの事件の「謎」がしだいに明らかになつていく。先生も皆も心の深い傷となつて、悲しみの中に生きてきたのだった。

の重い喘息患者（役所広司）の優しさだった。だが、彼の病状は悪化し、「信頼できるのは先生だけ、最期のときは早く楽にしてほしい」と頼まれる。愛と医療の狭間に立つ女医に、ついにその時が。が、最期の最期、意識がないと思つていた患者が突然、苦しみ暴れ出すのだった。この予想外の展開に、女医は重大な決断をする。医療行為か殺人か……。このいのちのやりとりは観客もはらはらするほどスリリングだ。……3年後、その時の女医の判断が刑事事件として問われることになる。映画の後半は一転して、検事（大沢たかお）の取調べを受ける女医のシーンとなる。「安楽死」は最高裁から判例が出されているのだが、その基準に基づいて、検事は女医を追及することになる。この有能な検事は、女医の判断が医師としてのそれではなく、プラトニックながらも女の愛がそうさせ、一線を越えたとの点を見逃さなかった。それにしても、初めに結論ありきの「自白調査」の作られ方。検事の追及はスリ

しかし、謎の真実が明かされることで、心の傷は癒されていく……。皆がまた心をひとつにしてカナリアの歌を合唱するラストシーン、涙が溢れ出た。それにしても吉永小百合の老いの影すらない若さの演技に驚く。

○月×日 リンカーン大統領暗殺犯の共犯メアリー・サラットは、米国初の女性死刑囚として歴史に名を残す。実際は、下宿屋として、何も知らずに息子の友だちに宿を提供しただけだったのだが。軍法会議では黙秘権を行使し、「声をかくす人」（ロバート・レッドフォード監督）になり、処刑された。しかし、その1年半後、最高裁は戦時でも民間人を軍法会議で裁くことを禁じた。そんなきっかけを作った人でもあった。○月×日 ある田舎町、初老の女が若く美しい青年と川へ水遊びに来る。聖霊降臨祭に捧げる「菖蒲」（アンジェイ・ワイダ監督）を採りに川に入るが、青年は水から上がってこなかった……。生は簡単に死に転じる。生のはかなさ、死への不安。  
(内藤 哲)